

論文

「成長し続ける保育者」を養成するプログラム (2)
—4年間の学びを支えるしくみ—野 田 さとみ
鬢 櫛 久美子

1. はじめに

本研究の課題は、「成長し続ける保育者」を養成するプログラム(1)」において示された養成プログラムにおける理論的背景を受け、具体的な計画を提示することである。D・ショーン(2001)の提示する専門家像である「反省的実践家」の概念を基礎とし、保育の専門家を養成するプログラムを作成した。目標の中心として掲げたのは「一人一人の子どもに寄り添い、保育を創造する保育者へと成長し続ける実践家」の育成である。ここでは「子どもを学ぶ、子どもに学ぶ、ともに学ぶ」という「学びの循環」を通して、「反省的思考の習慣」を身につけることを目指す4年間のプログラムの内容について報告する。

2. 「反省的思考の習慣」を身につけるプログラム

プログラムは、「子どもを学び、子どもに学び、ともに学ぶ」という学びの循環を体得し、反省的実践力の基礎として、自ら課題を見出し、問題を設定し、解決していく力、すなわち「反省的思考の習慣」を身につけることを目的としている。図1に示すように、「子どもを学ぶ」とは幼児教育・保育に関する知識・技術を学ぶこと、「子どもに学ぶ」は子どもと出会うことにより学んだ知識・技術を実践し深めること、そして「ともに学ぶ」は子どもとかわる自分自身の経験を仲間とともに振り返り次の学びへと高めること、と説明できる。これらをくり返し、より高次の課題を見出していくことが、「反省的思考の習慣」の体得へとつながると考えた。大学における4年間の教育課程の基軸としたのが「専門演習・研究科目」である。科目としては、1年次から3年次開講科目の「子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ」と4年次開講科目の「子ども学研究ゼミナール」である。これらの科目は、「子どもを学ぶ」、「子どもに学ぶ」、「ともに学ぶ」から構成されており、「子どもを学ぶ」、「子どもに学ぶ」、「ともに学ぶ」それぞれが、前学年での学びの上に、次の学年の学習が、高次のものとして積み重なるように設定され、体系的な学びとなるよう編成さ

れている。またこれらの科目は、各年次に開講されている他の専門科目との関連性も考慮している。

各年次の開講科目と「専門演習・研究科目」の位置づけを示したカリキュラム概念図(図2)に示したように、各学年の開講科目の学びを「子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ」及び「子ども学研究ゼミナール」において捉えなおし、学びを深めていけるような構成となっている。次項より、「子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ」及び「子ども学研究ゼミナール」の位置づけとプログラム内容について説明する。

3. 4年間のプログラム内容について

(1) 子ども学フィールドワークⅠについて

「子ども学フィールドワークⅠ」では、「反省的思考の習慣」を身につけるための第1ステージとして、子どもに出会い子どもの側に身を置き、幼稚園での観察とその内容について振り返り返ることを中心に学習することとした。

「子ども学フィールドワークⅠ」における学びの循環のテーマは、以下のとおりである。「子どもに学ぶ」は、幼稚園での観察、「ともに学ぶ」は、幼稚園での観察の記録をつけることと、記録を基に仲間と議論することによる振り返りである。「子どもを学び、子どもに学び、ともに学ぶ」は、5回繰り返される。循環による成果は、「子どもを学ぶ」は、子どもの側に身を置き子どもを理解する力を修得すること、「子どもに学ぶ」は、1回ごとの観察を振り返ることで、子どもを理解する観察力を高めること、「ともに学ぶ」は、発表・討議を通して、仲間とのコミュニケーション力をつけることとした。

(2) 子ども学フィールドワークⅡについて

「子ども学フィールドワークⅡ」では、「反省的思考の習慣」を身につけるための第2ステージとして、子どもの行為と表現のかかわりを理解すること、保育所で子どもと交わる実践、その振り返りを中心に学習することとした。

「子ども学フィールドワークⅡ」における学びの循環は、前期、後期に1回ずつ計2回行われるよう設定した。前期では、「子どもを学ぶ」は、「子どもの行為」や「表現」についての学習をすること、「子どもに学ぶ」は、保育所における4回の実践において、子どもの行為を観察し子どもの表現を読みとり子どもと交わること、「ともに学ぶ」は、子どもと交わるという行為の中で瞬時に読みとっていた「子どもの行為と表現のかかわり」を、

行為の後で振り返り記録することとした。後期では、「子どもを学ぶ」は、子どもの行為と表現のかかわりについて考察するために子どもの表現について学習すること、「子どもに学ぶ」は、保育実践の事例（教材）を用いて、子どもの行為と表現のかかわりを4つのテーマそれぞれの観点から学習すること、「ともに学ぶ」は、前期に実施した4回の各自の実践のうちの1つを分析の視点として振り返り、仲間と討議し、子どもの行為から子どもの表現を読みとり適切な子ども理解ができていたかを考察することとした。循環による成果は、「子どもを学ぶ」は子どもの行為と表現のかかわりから子どもを理解する力を高めこと、「ともに学ぶ」は、子どもの行為や表現を記録すること、学習したことをプレゼンテーションする力、仲間の発表を聞く力をつけることとした。

（3）子ども学フィールドワークⅢについて

「子ども学フィールドワークⅢ」では、「反省的思考の習慣」を身につけるための第3ステージとして、保育実践のプロセス（計画し、実践し、省察し、課題を発見し、次の実践において改善を試みる）を理解することを目的とし、「子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ」で学習したことをもとに、子育て支援の場での保育実践を行うこととした。

「フィールドワークⅢ」における学びの循環は以下のとおりである。「子どもを学ぶ」は、子育て支援実践の場であるキッズルームの観察、子どもの側に身を置いた子ども理解、「子どもに学ぶ」は、子どもとその保護者と交わる実践、そして「ともに学ぶ」は、仲間との討議から構成されている。次に、保育実践のプロセス（計画し、実践し、省察し、課題を発見し、次の実践において改善を試みる）に沿って、子育て支援実践を2回実施する。1回目の実践を振り返り、グループ討議により、実践を省察し課題を発見して、2回目の実践計画・実践に改善を試みる。そして、改善点が有効なものであったか振り返り、グループ討議をする。これらの循環による成果として、保育実践における、計画、実践、省察、次の実践という循環を理解し、保育実践の中で子どもを理解する力を修得することを目指した。循環による成果は、「子どもに学ぶ」は子育て支援の場での保育実践の遂行中における、状況を読みとり子どもを理解すること、「ともに学ぶ」は、保育実践のプロセスの中で、実践が子ども理解に基づいたものであったかを振り返り省察し、「反省的思考の習慣」の意義を理解することとした。

(4) 子ども学研究ゼミナールについて

「子ども学研究ゼミナール」では、「反省的思考の習慣」を身につけるための総仕上げのステージとして、「子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ」で身につけた子ども理解、「子ども学フィールドワークⅢ」で身につけた実践のプロセスにおける「反省的思考」の意義を基盤とし、探求のプロセス（課題発見、テーマの設定、実践・理論検証、問題解決）における「反省的思考」として理解すること、3年間の学修から各自の関心に基づき、「幼児教育・保育」を探求することとした。また、各自が実践研究や文献研究を通して進めた「幼児教育・保育」の探究を、専任教員の専門的な指導により卒業論文としてまとめることを課題とした。

「子ども学研究ゼミナール」における学びの循環は以下のとおりである。「子どもを学ぶ」は、これまでのすべての学修を振り返り自分の興味関心から、子ども学探究のテーマを設定し、探究のプロセスを通して子ども理解を深める、「子どもに学ぶ」は、探求のプロセス（課題発見、テーマの設定、実践・理論検証、問題解決）の各段階で、保育実践の場に出かけ、研究が目の前の子どもの姿に基づいたものであるか確認作業を行う、「ともに学ぶ」は、探求のプロセスの各段階で、自分の研究を基に対話し、他者の意見に耳を傾けるとともに、他者の研究を理解し、研究を深めることである。また、「反省的思考の習慣」を身につける最終段階として、子ども学探求のプロセスにおける「反省的思考」の意義を理解し、習慣づけることとした。

(5) 子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲと子ども学研究ゼミナールの関係

上記の項目では「フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ」及び「子ども学研究ゼミナール」の内容の詳細を説明してきた。4年間を通したそれぞれの位置づけ及び関係性については、図3に示した通りである。このように、各ステージにおける「子どもを学ぶ」「子どもに学ぶ」「ともに学ぶ」の学びの循環から、次のステージのより高度な課題の取り組みへとくり返していくことにより、「反省的思考の習慣」を身につけることを目指す。

「子どもを学び、子どもに学び、ともに学ぶ」の学びの循環を体得し、
「反省的思考の習慣」を身につける

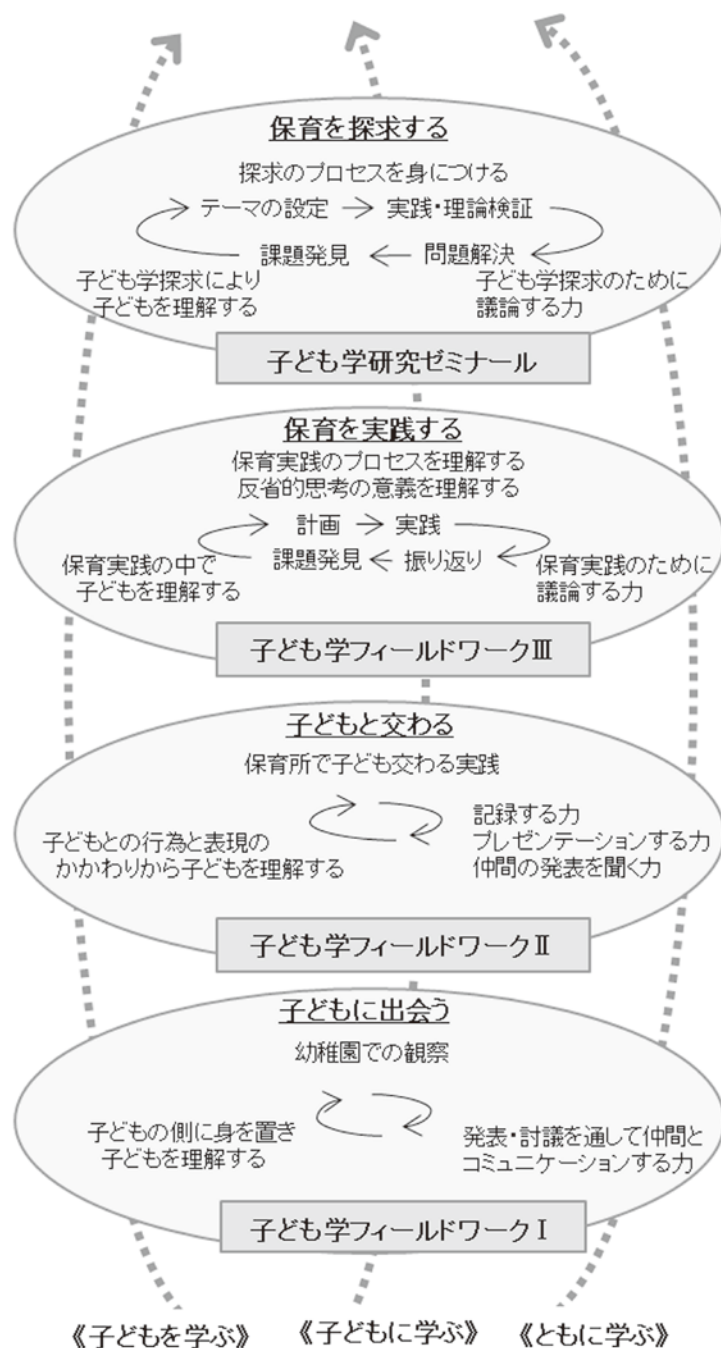


図3 子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲと子ども学研究ゼミナールの関係

4. まとめ

本研究においては、「学びの循環」を通して「反省的思考の習慣」を身につけるための4年間を通したプログラム、「子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ」及び「子ども学研究ゼミナール」の内容及びその関係性について具体的な提案を行った。これらのプログラムについては、今後、実際に実施することを通して課題や問題について検討し、卒業後への連続性についても視野に入れて考察し修正を加えて行きたい。

参考文献

- ・D・ショーン著・佐藤学・秋田喜代美訳（2001），専門家の知恵—反省的实践家は行為しながら考える—，ゆみる出版.
- ・Donald A, Schön(1987),Educating the Reflective Practitioner : Toward a Design for Teaching and Learning in the Professions. Jossey-Bass.

Educating the Reflective Practitioner at the Nursery Teachers Training College (2)

Noda, Satomi* Bingushi, Kumiko*

「成長し続ける保育者」を養成するプログラムにおける理論的背景を受け、本稿では具体的なプログラム内容を提示した。プログラムの目的は、「子どもを学び、子どもに学び、ともに学ぶ」という学びの循環を体得し、反省的实践力の基礎として、自ら課題を見出し、問題を設定し、解決していく力、すなわち「反省的思考の習慣」を身につけることであった。この「反省的思考の習慣」を大学4年間で段階的に学ぶために、中心として設定したのは「専門演習・研究科目」である「子ども学フィールドワーク「I・II・III」と「子ども学研究ゼミナール」であった。本稿では1年次から3年次開講科目の「子ども学フィールドワーク I・II・III」と4年次開講科目の「子ども学研究ゼミナール」について、その位置づけと科目間の関係性について計画の詳細を説明した。

キーワード：成長し続ける保育者 学びの循環 反省的实践家 省察 反省的思考